
悪を名乗る転生者と自分勝手な正義を振りかざす転生者

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪を名乗る転生者と自分勝手な正義を振りかざす転生者

【Nコード】

N9642Z

【作者名】

天叢雲

【あらすじ】

親友だった男に裏切られ、全てを奪われて殺された。

転生したが、その先にも裏切った男が現れ、また小さくも大きな幸せを奪われた。

復讐をするのか、しないのか迷う裏切られた転生者は……。

悪を名乗る転生者が主人公で自分勝手な正義を振りかざす転生者が
敵みたいな感じですよ。

序章第一幕（前書き）

最近のテンプレ転生者と前世に殺された転生者が織り成す物語です。

テンプレ転生者が敵、殺された転生者が主人公になります。

序章 第一幕

俺は全てを奪われた。

前世で親友だった男に裏切られ、殺された。

不憫に思ったカミサマが転生をさせてくれたが、俺が願ったのは
“何があっても裏切らない相棒が欲しい”。

二次小説お馴染みのチートな能力をもらって無双＋ハーレム作り
とかはしたくない。

カミサマに何度も聞かれたが、“何があっても裏切らない相棒”
しか欲しい特典はなかった。

力をもらうにしても、デメリットを消してまで手に入れたいとは思わない。

巷でテンプレチートと呼ばれる“無限の剣製”や“王の財宝”などの『Fate』の能力。

“写輪眼”やら“直死の魔眼”やら“複写眼”など魔眼を欲する
転生者もいるだろう。

苦勞もせず力を手に入れば溺れるだろうから前世でも欲しい
と願ったことはない。

だが、その物語のキャラクターとは会って話をしてみたいという
欲望はある。

特に、絶望の崖っぷちで生きてきたキャラクターと話がしたい。どうしたら、あんなに真っ直ぐに生きれるのかとか、色々。

前世でどこを間違えたのか、俺は学校の嫌われ者になり、親友は学校の人気者になっていた。

最初は目立たない、普通の学生一人だったのにどうしてこうなったのだろうか……。

殺される寸前、親友だった奴は最後にこう言った。

『俺が更に人気者になるために死んでくれ。親友だろ?』

……だから俺はカミサマに特別に転生する権利を与えられたのだ。

特典については、“何があっても裏切らない相棒”だけで終わらせ、カミサマと別れた。

渋々、といった感じのカミサマは新しい生を与えてくれ、俺は二次小説お馴染みの……。

“魔法少女リリカルなのは”の世界に転生することになった。

・・・すまんカミサマ。俺は普通の世界にしてくれって言ったはずだぞ？

なんで魔法とかファンタジーな世界なわけ？

魔砲少女が蔓延る世界で生きろって？関わらないようにするにはするが無理じゃね？

転生した俺は赤ん坊スタートという羞恥プレイをしなくて済んだことにまず感謝した。

見た目は幼稚園児くらいだろうか？黒髪黒目の日本人特有の容姿で少しカッコいい程度のルックスである。

誰かに拾われて・・・みたいな展開にはならず、捨て子として判断された俺は施設に送られた。

二次小説では原作キャラの父親や母親に拾われるみたいなのはあるが、普通はない。

むしろ違和感だらけでカミサマが介入したのか？と思う。

施設では特にトラブルなどはなく、年上とも年下とも仲良く暮らすことができた。

カミサマの特典の“何があっても裏切らない相棒”はカミサマ側の不手際でまだ時間がかかるようだ。

お詫びに東方projectのスペルカードを全部送ってきた。

・・・あ、いや。魔力とか妖力ないんだけど俺・・・。

確定。あのカミサマはあかいあくま並のうっかりスキルがあるんだろうよ。

魔力、ねえ・・・俺にもあるのかな？

普通の世界に行きたいと言ったが、やはり魔法は使ってみたい
と思っている。

・・・んー、誰か引き取ってくれる人が現れるまでのんびりと過
ごそうかな？

序章第一幕（後書き）

まだ裏切った男が転生するのは知りません。

序章第二幕（前書き）

何故だ。ふと浮かんだはずなのにスラスラ進むぞ。

序章第二幕

俺が施設に預けられてから二年。
時間は飛んだが気にしない。

幼稚園児だった俺は小学生になり、施設ではお兄さん扱いにされている。
通っている小学校は“聖祥学園男子校”である。

・・・うーむ。魔砲少女が通う小学校の横にあるみたいなんだが、助かったな。

二次小説じゃ、同じクラスになったりとかするが、この世界では男子校と女子校に別れるようで助かった。

そして引き取り云々のことだが、同年代のほとんどは誰かに引き取られていった。

ま。俺も誘われたのだが、別の子を推薦して施設に残ったりしている。

いい人か悪い人かは前世の経験でわかるから、親の愛を知らない子に味合わせて上げよう。ってのもあるけど。

だからか、施設の職員には“大人びた子供”という印象を持たれている。

たまに手伝いとかしているからか、職員とは良好な関係を築けている。

で。カミサマからお詫びに送られたスペカだがまっつつつたく役に立たん。

妖力、神力、靈力もない俺に大妖怪や巫女とかのスペカをどう使えと？

あのカミサマ、まさか遊んでんじゃねえよな？

何はともあれ、俺は第二の人生を満喫している。

・・・不満を言えば高校生なのに小学生をやるとか嫌だけど。

精神年齢が違うから付き合いにくいのなんのって。

そして、第二の人生の名前もいつの間にか決まっていた。

西行寺雄志。どうやら手紙に書かれていたらしい。

・・・嫌な予感がするのは気のせいか？

脳裏にぼやぼやした冥界のあの人が振り返る姿が浮かんだぞ。

隣には半人半霊の付き人が疲れたような顔をして・・・げふん。どうやら昼から夢を見てるようだな。うん。

ま。気にしないでゆったりと昼寝をしますかね・・・。

なんだこれは。

12

目が覚めた、いや、無理矢理覚まされたというべきか。
そんな風に思ってしまった俺は現実が受け止められないといった
感じに呆然としていた。

まず目に入ったのは赤と黒。

もうもうと立ち込める黒い煙と赤い液体がこびりつく施設・・・
いや、施設だった場所であった。
いつの間にか外に出ており、異臭に顔を歪ませながら立ち上がる
うとする腹に違和感を感じた。

「う、嘘だろおい・・・」

手を触れてみると、そこには施設を支えていたであろう、小さな鉄骨が腹を貫通していた。

それを見ると、口から血が溢れ出し、痛みが遅れてやってきた。

なんだ。なんだこれは！ いったい何が、何が起きたんだ！

腹に刺さる鉄骨に触れながら痛みを耐えていると、どんどん意識が無くなるのを感じた。

血がどンドン流れ出し、鉄骨に伝っていくが、止められずにまた血を吐き出した。

・・・畜生・・・俺が、俺達が何かをしたのかよ・・・。
なんで・・・新しい人生を歩み始めたのにこんな目に・・・。

「いた！ こっちにいたわよ！」

「！ 早く治療をしないと！」

「わかってる！ わかる？ わかるかしら！？ 返事をして！」

ペシペシと頬を叩かれるのを感じたが、それよりも急速に意識が闇に沈んでいくのが早かった・・・。

力が抜けるのを感じると、頬を叩いていた誰かは慌てたように叫んでいた。

序章第二幕（後書き）

次回からは無印・・・かも。

無印とエースはパパッとやって空白期から進めたいと思います。

序章第三幕

・・・ここ、は・・・？

気が付けば、俺は白い部屋のベッドに寝かされていた。
ピッピッピッとなる心電図の電子音を聞きながらポーツとする頭
で状況を把握する。

確か俺は・・・施設で昼寝をして・・・っ！

「っ、っぐあうえっ・・・！」

止まっていた思考が覚醒するように、あの地獄の光景が一気に頭
に流れ込んできた。

見るも無惨な姿になった施設、住んでいた子供達や職員の死体・
・それらが鮮明にはつきりと目に浮かんだ。
喉から込み上げる吐き気を気合いで押さえつけながら息を整える
ように落ち着かせようとする。

「あら？ 目が覚めましたか？」

「っ！」

気分が落ち着き始めると、窓側の備え付けの丸椅子に誰かが座っ

ているのが見えた。

その誰かは女性のようで、ぼやぼやした笑顔を俺に向けながら話しかけてきた。

・・・ま、まさかこの人は・・・。

「さ、西行寺幽々子・・・？」

「あらら。私の事はご存じなのね？ なら自己紹介はいらないわね」

「な、なんでここに・・・いつつ・・・！」

物語のキャラクター、東方projectの登場人物である西行寺幽々子を見て混乱する。

驚きすぎて起き上がると、腹と頭が痛み、顔を歪めながら腹を押さえた。

西行寺幽々子はあらあら。とぼやぼやした笑顔のまま、急に起き上がった俺をベッドにゆっくりと寝かせて掛け布団をかけてくれた。

・・・そっいや、腹に鉄骨刺さってたな・・・忘れてた。

だが、なぜ頭まで怪我をしてるんだ？

そんな俺に、西行寺幽々子はゆっくりと、語り出し始めた。

まず、施設の崩壊。あれは爆発事故によって吹き飛ばされたようだ。
原因は不明だが、爆発の規模が大きいため、現在も警察が捜査を

しているらしい。

そして・・・俺は鉄骨が刺さっており、意識不明の重体で病院に運ばれて治療したらしい。

腹の傷は消えておらず、まだ包帯が巻かれていた。

頭は瓦礫が頭にぶつかったようで、血を流していたみたいだ。

・・・さらに、俺は約二ヶ月半も眠っており、寝ている前は春だったのにもう夏が近い。

「・・・それで、俺以外に生き残った奴は・・・」

「・・・残念だけど、生き残りは貴方だけ。職員も子供達も皆、即死だったわ」

「・・・なんでっ！なんでこんなことに・・・！俺達が何かをしたっていうのか！！」

「落ち着きなさい。傷が開くわよ」

現実を受け止められずに右腕に点滴がささったまま、膝を両手で殴り、シーツを乱暴に掴む。

なんで・・・なんであんないい人達が死ななきゃならないんだ・・・

・！

何かをしたわけでもないのに・・・原因不明の爆発事故とか・・・

！なんなんだよっ！

自然と溢れる涙を流しながら歯を食いしばりながら死んだ子供達

や職員の人達を思い出す。

皆、優しくかった。入ったばかりの俺を受け入れてくれた。

泣く俺を西行寺幽々子・・・幽々子さんは静かに抱き締めてくれた。

「まず、簡単に説明するわね？」

「・・・・・・・・」

少しだけ落ち着くと、幽々子さんは俺の手を握りながら説明をしてくれた。

カミサマの特典の“何があっても裏切らない相棒”とは幽々子さん達であり、カミサマから俺の世話を頼まれたそうだ。

幻想郷はいいのか。と聞くと退屈な日々から抜け出せると皆が即答したようだ。

・・・カミサマ、誰が女性の相棒を頼んだ・・・。

そして、他にも幻想郷から来た妖怪や人間はいるようだが、戸籍やら住所を探しているようである。

幽々子さんは志願して俺の看病をしてくれ、ずっと一緒にいてくれたみたいだ。

「もうひとつ、貴方に伝えなければならぬことがあります」

「・・・まだ、なにか・・・？」

まだショックから抜け出せてないからか、腑抜けたような返事を
してしまっ。

だが幽々子さんはぽやぽやした笑顔を浮かべ、頭を撫でながらま
た話をする。

それは、俺がもっとも認めたくない事実であった・・・。

序章第四幕

あの施設の爆発事故から二年。

俺は小学三年生になり、義務教育である小学校に通う毎日を送っている。

だが、爆発事故の影響なのか、黒かった髪は大きな心的ショックにより、色素が抜け落ちて真っ白になってしまった。

他人とは違う髪色が気に入らないのか、学校では毎日虐められている。

教師は見て見ぬフリ。相棒である幽々子達は激昂したが、気にしてないと止めておいた。

カミサマの特典の“何があっても裏切らない相棒”のメンバーには幽々子を加え、幻想郷でも有名な女性がいる。

西行寺幽々子、魂魄妖夢、博麗霊夢、霧雨魔理沙、東風谷早苗がそれに入る。

最初、八雲紫や風見幽香も立候補したが、カミサマ自身が止めたらしい。

・・・何故か全員がねんどろいどみたいになってたけどな。

霊夢と魔理沙は見たことがあるが、早苗や妖夢は初めて見たわ。なのに何故か幽々子だけは元の魅惑的なボディのまんまだが。

「ちょっと雄志。あんた何をしてんの？」

「・・・カミサマからもらったスペカを整理してる。多すぎて困る

から

「おうおう。私のマスターパークまであるじゃないか。聞いてたけど驚いたぜ」

ちよつと前に起きた動物病院の爆発事件で学校側は生徒の安全のために臨時休校にした。

・・・おかしい。前世の記憶だつたら動物病院は何か荒らされたり、破壊されるだけのはずなのに爆発？

俺がいるから物語に何か影響が出たのか？

ちよこちよここと歩き回る霊夢と魔理沙にスペカの整理を手伝わせながら思考から抜け出す。

小さな身体に最初は文句を言ってたが、慣れたのか、ねんどろいど生活を満喫する二人。

それぞれが持つ霊力や魔力に妖力を使えば元に戻れるようだが、燃費が悪いからあまり使いたがらない。

「大丈夫ですか？ 少しボーツとしてますが」

「・・・なんでもない。ちよつと考え事だよ」

スペカを整理し終わると、ねんどろいどの早苗が肩に乗って心配そうに声をかけてきた。

幻想郷の住人は空を飛べるみたいで羨ましいものだ。

裏切らない相棒・・・というよりは家族。

霊夢も魔理沙も早苗も俺が頼んで巻き込んだのにも関わらずに、怒らずに一緒にいてくれて嬉しい。

前世では母親がいたが、仕事が忙しくて構ってくれなかったから愛情に飢えているのだろうか・・・。

「あら。今日のご飯は何かしら？」

「ちよつ！ 幽々子様、つまみ食いはやめてください！ 雄志様！ 助けてください！」

「・・・わかった」

爆発事故の影響で精神ココロに大きな傷を負っただけでなく、声も出しづらくなってしまった。

そのせいで髪色と相まってイジメが酷くなっている。

根暗、空気、真つ白白助。これが学校での渾名であり、不名誉な呼び方である。

元のサイズの妖夢は料理をしており、幽々子はつまみ食いをしてパクパクと食べていた。

泣きそうな妖夢の援護に俺はつまみ食いをする幽々子の腰に抱きついた。

「・・・幽々子、駄目。我慢しろ」

「いいじゃないですか。私のお腹が泣いてるんですよ？」

「その前に妖夢が泣いてるじゃない。いい加減にやめなさいよ」

「そうだぜ。私らの飯まで食ってもらっては困るんだぜ」

「・・・早苗、手伝ってあげて」

「わかりました。妖夢さん、手伝います」

「雄志、あんたの尻尾で捕まえときなさい。またつまみ食いされちゃ堪ったもんじゃないわ」

「・・・了解」

台所に集まる全員。

俺は普段は隠している真っ白な尻尾を一本だけ出すと、幽々子の身体に巻き付けて縛った。

・・・尻尾。これが幽々子から聞かされた俺の正体。

前世では母親が大妖怪の九尾の妖狐であり、父親は普通の人間だった。

九尾の妖狐である母親が父親に一目惚れ、禁断の愛を育み、俺が生まれた。

つまりは俺は半人半妖の妖狐。母親譲りの妖力と尻尾があるのだ。

母親は八雲籃とはまた違う九尾の妖狐であつたため、カミサマや八雲紫と交流があつたようで、裏切らない相棒で八雲紫が幽々子達を推薦したらしい。

俺としては、自分が普通の人間ではないから施設の皆は殺された

んじゃないかとずっと悩み、後悔している。

昔から半人半妖の半端者は災いと呼び寄せると言われているから。

自身の白い尻尾に頬擦りする幽々子を見ながら忌々しい。と自分の尻尾を見る。

幽々子や霊夢達は綺麗だと言うが、俺にとっては災厄の証のように思えてならない。

これがあつたから・・・関係ないあの人達を巻き込んだのかと何度も何度も思う。

まだ入院してた頃は酷かった。幽々子から聞かされた日の夜から夢に死んだ子供達や職員が出てくるのだ。

延々とお前のせいで・・・お前がいたから死んだんだ・・・死んで償え。とまさに悪夢だった。

耐えられずに戻し、自殺までしようとしたが、病院に止められたりした。

退院した頃には抜け殻のような毎日を過ごしていた。

学校は行かずに八雲紫が用意した家の部屋に閉じ籠り、ずっと泣いていた。

泣いて、泣いて、泣いて。幽々子達に慰められてやっと最低限の日常生活を送れるようになった。

「んふ〜。モッフモフだわ〜」

今度は俺の尻尾に顔を埋める幽々子。スーッと匂いを嗅ぐように深呼吸していた。

気が付けば、霊夢と魔理沙が頭の上に座って喧嘩をしていた。

これが最近の日常。

俺が欲してやまないものだが、どこかモヤツとする毎日だ。

・・・許される日は来るのだろうか。

原作のジュエルシード事件、通称PT事件は介入はせず、被害があれば直すといった風にしようと話し合った。

今回の動物病院の爆発事件の後始末のように。

序章第五幕

プレシア・テストロッサ。

彼女が起こしたジュエルシードを巡る事件、PT事件。

それはもう終わりも近付き、プレシア・テストロッサがいる時の庭園の時空の狭間、八雲紫から借りたスキマで覗いている。

『私は行くのよ・・・忘れられた秘境、アルハザートへ！』

『母さん！』

「・・・母親があれば子供は辛いでしょね・・・」

「・・・うん・・・今まで母親のためになるはずなのに裏切られるような結末は救われないな」

今回は護衛に早苗がついてきており、スキマに浮かぶ俺の肩の上に座りながら時の庭園の一室を見ていた。

霊夢と魔理沙は幻想郷の異変を解決するために幻想入りし、幽々子と妖夢は八雲紫と話しているために不在。

スキマで浮かぶにしても、妖力が無ければ無理なのでまだ嫌う自身の白い尻尾を三本出して椅子のように座っている。

九尾の妖狐である母親の遺伝子か、九本の白い尻尾がある。

まだ妖力をコントロール出来ていないため、最大でも四本しか出

せない。

同じ九尾の妖狐の八雲籃から指導は受けているがあまり進んでいないといったところ。

『さあ、行きましようアリシア・・・私とアルハザートへ・・・』

『母さん！ 待って母さん！』

「・・・動きましよう！ 死なせては駄目ですよ雄志さん！」

「・・・いや、誰かが時空に介入してきた」

早苗に言われるまでもなく、助けるつもりだが、誰かがこの時の庭園に転移してきたのがわかった。

場所は時の庭園の彼女達がいる場所ではなく、プレシア・テストロッサが落ちていく、虚数空間の中だった。

来たか・・・前々から予想はしていたが、このタイミングで介入とは馬鹿なのか、頭が回るのか・・・。

前の高町なのはとフェイト・テストロッサのジュエルシード争奪戦では影がチラチラ見えていたが、駆けつけた時には消えていることが多かった。

だからこそ、この場でそいつを、“もう一人の転生者”を見極める。

虚数空間に落ちていくプレシア・テストロッサを追い掛けようとするフェイト・テストロッサを高町なのは達が無理矢理引き上げ、撤退する。

そしてプレシア・テストロッサは自分の娘が入っているポットを抱き締めながらどこか、達成感が溢れる顔をしていた。

「……？ 少しだけ気になるな。」

後でさとり様に頼んで心を覗いてもらおうか？

「！ 来ました！」

「……また、捻りも何も無い……」

『あ、貴方……なぜ虚数空間に！？』

『死ぬよクソババア。俺のフェイトを傷つけやがってよ、そのアリシアだけ渡して一人だけ落ちやがれ』

『……！ アリシアは渡さない！ 貴方のような奴にはね！』

落ちるプレシア・テストロッサの前には銀髪の少年が現れ、金色に輝く鎧を纏いながら虚数空間に浮いていた。

プレシア・テストロッサはポットの自分の娘を庇うように杖を構えるが、咳き込んで上手く構えられないようだ。

「……銀髪、まさかとは思うが目もオッドアイじゃないよな？
だとしたら痛い転生者って扱いをしなければならぬぞ？」

「……なんか、気持ち悪いです。雄志さん」

「・・・同感」

早苗もこれはないわーみたいな顔をしていた。

なぜ厨二病に犯された奴等は銀髪オツドアイを狙うんだ？オプシヨンでイケメンフェイスとニコポにナデポとか。

あれ、軽い催眠だから本心で付き合えるはずはないのにな・・・。

銀髪の転生者はプレシア・テストロッサに何かを話すと、指を鳴らした。

後ろの空間が歪み、波紋の中心から赤い槍が見えると、そのまま吸い込まれるようにプレシア・テストロッサの心臓に突き刺さる。

「あっ・・・！」

「・・・救わずに殺すか・・・なんて奴だ」

早苗は顔を覆い、心臓に突き刺さる赤い槍から視線を逸らした。

逆に俺は冷静にプレシア・テストロッサに刺さる赤い槍を注意深く観察する。

どうやら前の爆発事故で罪悪感やら人が死ぬ姿に驚かなくなったようで、自分に吐き気がしてきた。

・・・あれは間違いなく、刺し穿つ死刺の槍ゲイ・ホルグだな。

真名解放してプレシア・テストロッサを殺したのか・・・。

逃がすかつ・・・！ 俺の受けた苦しみを・・・味わえ！

「雄志さん！ お願いですから正気を取り戻して！ 憎しみだけで戦っては駄目です！」

「うぐつ・・・グ、ガガガッ・・・！」

母親から貰った九本の白い尻尾がいつの間にか全開になっており、妖力でスキマが軋む音をはっきりと聞いた。

消えかけるあいつを逃がすまいと頭に浮かぶ言霊を叫ぶ。

“ 妖炎狐火 ”

急激に力が抜ける。

早苗は肩から降りて目の前で叫んでいる。

尻尾から狐火が灯るのが見える。

下卑た笑いをするあいつを睨む。

狐火が放たれ、スキマを埋め尽くす。

狐火が消え、視界に金髪の女性が見えた。

「嫌な予感はしてたけどまさか、ね……。暫く眠りなさい」

そんな声を聞くと、ぶつんと意識が闇に沈んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9642z/>

悪を名乗る転生者と自分勝手な正義を振りかざす転生者

2012年1月2日09時46分発行